

ユーラシアを探して -
ヨーロッパとアジアの融合を巡る
ヨーゼフ・ボイスとナム・ジュン・パイクの旅

渡辺真也

「東」と「西」とを隔てる架空の分断は、主にヨーロッパにおけるキリスト教世界と、その東方に位置する異質な文化を区別する為、ヨーロッパの文化史の中で形成された。戦後ヨーロッパにおける「他者」の哲学者として知られるエマニュエル・レヴィナスでさえ、アジアと仏教に対しては侮蔑的であり、ヨーロッパをその中心に据えた。

ヨーロッパとアジアの双方とも、それらの東西に位置するものとの関係において存在可能であり、お互い単独で存在することはできない。しかし、一旦地理的かつ文化的な実体が「ヨーロッパ」や「アジア」、もしくは「西」や「東」と名付けられると、その対となるものとの関係において存在するのではなく、想像上のものそれ自体があたかも存在しているかのような印象を生み出してしまふ。

ヨーロッパ(Europe)とアジア(Asia)を含むユーラシア(Eurasia)は、ひとつの連続した大地である。ヨーロッパとアジアとを固定的に分断してしまうことは、東洋と西洋と呼ばれているものが歴史的・文化的ルーツをユーラシア大陸に共有していることへの理解を困難にしてしまふ。キリスト教に起源を持ちヨーロッパ近代への道を準備したコギトに矛盾が証明されたからには、コギトを経由して世界を捉えるのではなく、現代美術はそのオルタナティブを見つけるべく、近代のルーツを再考する必要があるだろう。今までの現代美術の表現言語は、近代が抱える矛盾が生んだシンボルを概念的にどう扱うかであったが、21世紀には、そのような矛盾の原点に戻って行く行為こそ、新しい表現言語の基礎となるだろう。

1962年にケルンでの最初の出会いの後、ヨーゼフ・ボイスとナム・ジュン・パイクは、「ユーラシア(Eur-Asia)」と呼ばれる生涯に渡るコラボレーション・シリーズを開始した。ヨーロッパとアジアへの関心を共有する彼らは、ヨーロッパ(=西)とアジア(=東)は一つの大륙文化であると考えた最初のアーティストたちであり、その二つを「ユーラシア(Eur-Asia)」として融合させようと試みたのだった。

1984年、パイクの即興ピアノとボイスの「コヨーテ」のボイスパフォーマンスによる彼らの最後となったコラボレーションパフォーマンス「öö」が、東京の草月ホールにて行われた。個展や数多くの講演を伴うボイスの訪日は、彼にとって最後の活動の一つとなり、日本のアートシーンに多大な影響を与えた。

しかし残念なことに、彼らの「ユーラシア」に関する芸術活動は、特にテーマの幅広さや言語障壁、1984年のボイス日本訪問のビデオ記録の紛失に伴う情報不足や東側からの視点の不足などから、十分な研究がなされていない。しかし、ボイスの1984年の訪日ビデオ記録の再発見により、「ユーラシア」プロジェクトの意図を理解することが可能になった。

本稿は、1963年のボイスによる「ユーラシア-シベリア交響曲」や1976年のパイクによる「ガダルカナル・レクイエム」を初めとする先駆的な「ユーラシア」活動の分析のみならず、彼らが達成しようと試みたものの不完全なままに終わったものも分析する。その後、ヨーロッパとアジアの双方に向かって広がった仏教の影響を立証することで、「ユーラシア」に関連するこれらの失われた繋ぎ目を接続しようと試みる。

フルクサスのメンバーとしてのボイスの最初のアクションは、1963年にベルリンのフローベントギャラリーにて開催された「ユーラシア-シベリア交響曲 第32回フルクサスムーブメント」だった。その後の1966年、彼はギャラリー・レネ・ブロックにて「ユーラシア：シベリア交響曲の第32回ムーブメント」を行った。ここでボイスは、人間にとって「他者」である観客とコミュニケーションを計ろうと試み、彼は野ウサギと共に図を描いた。ボイスは床からアラーム機能付き時計が添えられた2つの十字架を拾い、黒板の上に

十字架をドローイングすると、それを消し始めた。十字架の半分を消した後、彼はそこに「ユーラシア」という文字を刻んだ。第三十四回ムーブメントを見た美術史家トロエルズ・アンダーセンは、分割された十字架はキリスト教世界をローマとビザンチンとに分断したシスマを、半分の十字架はヨーロッパとアジアの再統合を表している、と解説した。¹

1963年、ボイスは政党「EURASIA」を結党した。分断された東と西の形而上学的思想として表現されたユーラシアの概念を通じて、ボイスは東ドイツと西ドイツ、そして当時イデオロギーで分断されていた東欧と西欧、そしてその中で最も重要な、ヨーロッパとアジアの精神世界の統一を試みた。

1965年に作られた「ハプニング」本の中で、パイクは韓国におけるファシズムの歴史と個人的な体験、さらにそのドイツやソ連のファシズムとの関係について書いている。「1932年、7月20日、ヒトラーに反対する暴動の日、私は…ソウル/韓国に生まれた…もしもドイツ人たちがヒトラーに対してさらに反発していたのなら、スターリンと戦って流れた貴重な血は必要なかっただろう。」²

1967年のアクション「ユーラシアの杖」にて、ボイスは「東-西の遊牧民」の役割に身を投じた。靴底を交差させて、彼は十字架を形成した。アンティエ・フォン・グラヴェニッツは、このクロスは地理的な指標のみならず、心の指標でもあると説明している。そこでボイスが話したのは脚色された物語であり、ヒーリング剤、運動、聖なるオブジェクト、そして書き言葉などの断片だった。³

第二次世界大戦において日本と米軍の間で激しい戦闘の舞台となったソロモン諸島最大の島、ガダルカナル島へのパイクの1976年の訪問は、彼の最も政治的なビデオコラージュ作品「ガダルカナル・レクイエム」へとインスピレーションを与えた。戦場だった場所にパイクがバイオリンを引きずって来ると、GIの制服を着、背中にヨーゼフ・ボイスのフェルトチェロを背負ったシャルロット・モーマンが匍匐（ほふく）前進で近づいて来る。浜辺を渡り切ったモーマンは、彼らが偶然発見した航空機の残骸の上で、「ソナタ - ヨーゼフ・ボイス」を演奏した。⁴「ガダルカナル・レクイエム」は、第二次世界大戦における個人的体験を直接扱った、パイクとボイスにとっての交差点となった。

ペーパー「Eurasianausea」は、ヨーゼフ・ボイスとダライ・ラマとの間で開かれた1982年の会議の様子を調査したものである。ボイスはダライ・ラマとの「永久パートナーシップ」を要請し、7000本の樫の木を開始した1982年ドクメンタ7のオープニングに彼を招待した。ボイスは「ダライ・ラマとの協力で私たちはユーラシアを実現するだろう。私の昔のコンセプト、ユーラシアを。」⁵と述べている。ダライ・ラマはドクメンタのオープニングに参加できなかったものの、彼らは1982年10月27日に議論の機会を設けることができた。ボイスの芸術作品と自身の活動の間いくつかの関連を見つけたダライ・ラマは、「ああ、このアーティストは私たちと同じく『無常』に取り組んでいる」⁶と述べている。

そこでボイスは、彼が「社会彫刻」として実践した様に、ダライ・ラマはチベットを「精神的経済」を実践する人間社会の例として作っていると提案した。ボイスは人間の創造性を資本の機能として、さらに7000本の樫の木を「社会彫刻」と「精神的経済」の実行として定義

¹ Anderson, Troels. *Blockade 69*. Berlin, Galerie René Block, 1969.

² Becker, Jürgen and Vostell, Wolf. *Happenings: Fluxus Pop Art Nouveau Realisme*. Hamburg, Rowohlt Verlag, 1965. P444-445

³ Gravenitz, van Antje. *The Old and the New Initiation Rites*. In: Robert Lehman Lectures on Contemporary Art. Edited by Cooke, Lynne, and Kelly, Karen. New York, Dia Center for the Arts, 1996. P69-71

⁴ Decker-Phillips, Edith. *Nam June Paik: Idea and Chance*. In: Nam June Paik. Edited by Lee, Sook-Kyung and Rennert, Susanne. London, Tate Publishing, 2011. P199

⁵ Thompson, Chris. *Felt: Fluxus, Joseph Beuys, and the Dalai Lama*. Minneapolis, University of Minnesota Press, 2011. P283

⁶ Wijers, Louwrien. *Unpublished interview with the author*. Amsterdam, February 2000.

しようと試みた。ボイスは、高度に発達した西洋の経済と高度に発達した東洋の精神性を、西洋のマテリアリズムに対する抵抗の手段として統合しようと試みたのである。しかし、ボイスのユーラシアのアイディアは溢れ出てしまい、その軌道を見失ってしまった。その後、中国共産党による政治的圧力から、ダライ・ラマはボイスに会うことができなくなってしまった。

ボイスの死から数年後、ダライ・ラマは7本の樫の木を購入し、そこには「ヨーゼフ・ボイス、彼の7000本の樫の木プロジェクト、および彼のダライ・ラマ法王との永久協力を記念して」⁷と書かれていた。またボイスの影響下、ダライ・ラマは経済学者スタニスラフ・メンシコフに、「共感経済」のモデルを作る様に依頼している。

1986年のボイスの死後、アジアとヨーロッパのステレオタイプなイメージに別れを告げるべく、ナム・ジュン・パイクは衛星を利用した大規模な芸術作品「バイバイ・キップリング」を制作した。「ああ、東は東で西は西、この対が出会うことはない」で始まるラドヤード・キップリングの文章「東と西のバラード」からインスピレーションを得たパイクは、この立場に別れを告げようと試みた。⁸ この野心的な衛星テレビアートプロジェクトは、ニューヨーク、東京、ソウルを繋ぎ、キース・ヘリングや磯崎新のインタビュー、フィリップ・グラス、ルー・リードなどによる演奏を特色とした。また、西洋クラシック音楽の日本でのパフォーマンスは、歌舞伎ダンサーのグループを伴って行われた。

ナム・ジュン・パイクは、韓国文化の深いルーツを知るには、漢王朝による支配以前の知識が必要だと考えた。韓国のルーツはシベリアにあり、地球の寒冷化の結果、シベリアに住む人々は朝鮮半島へと下って来た。この先祖の影響は奇数のリズムからなる韓国のシャーマニスティックな伝統音楽に表れている。このリズムは東と西で共通のものだと考えたパイクは、衛星技術を用いて東と西を結びつつこのリズムを用いて、東と西は永遠に分かれたままだというキップリングのステレオタイプな考え方に別れを告げたのである。

1993年のボイス追悼として、パイクは「ユーラシアの道」と呼ばれる作品を作った。このインスタレーションは、日用品と3つのビデオを使用して、ユーラシア大陸の「北の道」を示している。このビデオは、モスクワから、日本軍捕虜の強制労働によって建てられた都市であるイルクーツクへの旅の記録を収めたものだった。また1993年のベニス・ビエンナーレにて、パイクは「チンギス・カーンのリハビリテーション」と名付けられたビデオ彫刻作品を制作したが、そこでのチンギス・カーンは冷酷な戦士としてではなく、韓国の古い自転車に乗った思慮深いドライバーとして描かれた。東洋に関する誤報と、それによって西洋世界に生じた恐怖に意識的だったパイクは、モンゴル帝国が友愛の帝国だったと言い続け、西洋世界にプロパガンダとして広まったイメージとは異なるとした。

チンギス・ハーンの息子がモンゴル初の欧州偵察部隊を率いていた際、彼らが出会った最初のヨーロッパ人がヴェネツィア商人だった。彼らは友好関係を結び、将来におけるパートナーシップの価値に気付いた。今後ヴェネツィア人は、彼らが訪れたすべての国の経済力と軍事力の詳細なレポートを供給し、これらの国でモンゴル人が必要とするプロパガンダを広めることと引き換えに、モンゴル人はヴェネツィア以外が所有する全ての取引所を破壊することに合意することで、ヴェネツィアは貿易を独占することができたのである。⁹この目標に向けたモンゴルの動きは、クリミアにあったジェノヴァの駐屯地の破壊に始まった。ここはヨーゼフ・ボイスが操縦するドイツ空軍の戦闘機が第二次世界大戦中に墜落してタタール人に

⁷ Claus, U We. *Der Baum, der Stein*. Stiftung Museum Scholoss Moyland, 1998. P25-26.

⁸ There is a misinterpretation of Paik about Kipling's work, since Kipling tried to overcome the idea of East and West, as Paik tried also. For more details, read J. K. Buda's "Rudyard Kipling's 'The Ballad of East and West'," Otsuma Women's University Faculty of Literature Annual Report, Vol. XVIII. No. 19, 1986.

⁹ Chambers, David. *The Devil's Horsemen: The Mongol Invasion of Europe*. London, Weidenfeld and Nocholson, 1979. P115

よって救出された場所であり、また戦勝連合国によるドイツ分割が決められたヤルタ会談の場所でもあった。

タートル人に起源を持ち、その後モンゴルそして満州へと受け継がれた彼の韓国人の DNA に気付いていたパイクは、ルネサンス以来西洋美術として進化して来た現代美術を再認識するべく、彼の全存在を表現した。¹⁰パイクはこう述べている。「私は私自身に、なぜ私は最も極端なものに興味を持つのかを、もう一度問うてみた。なぜならそれは、私のモンゴルの DNA があるからです。モンゴル・ウラル・アルタイの馬に乗った狩猟民族は先史時代、シベリアからペルー、韓国からネパール、ラップランドまで世界中を移動しました。彼らは中国の農耕社会のように中央に対する指向はありませんでした。彼らは遠くを見て、遙か遠くに地平線を見つけると、彼らはさらに先を見る為に、行かなくてはならなかった。」¹¹

第二次世界大戦を耐え抜いたヨーゼフ・ボイスとナム・ジュン・パイクは、西洋に起因する近代の矛盾に気付いていた。日本の占領下に韓国で生まれ、朝鮮戦争時に日本へと逃れて来たナム・ジュン・パイクは、植民地主義と近代の影響に気付いていた。音楽学、美術史、哲学を東京大学で学んだ後、彼は学問を続けるために西ドイツへと移住した。彼らの精神的な友好関係について、パイクは「私達は 1943 年に、ボイスが戦争で墜落した時に実際に出会ったのです」¹²と述べている。

ボイスはアジアに関して、深い興味を抱いていた。ボイスは幼年期、どこでも杖を持って行き、自分自身が遊牧民の騎手であると想像した。¹³モンゴルに関する彼の興味は、ヘラジカに乗ったチンギス・カーンの娘を描いた彼の 1959 年の水彩画に既に現れている。¹⁴一方、ゲーテを通じて東方に関する理解を得ていたボイスは、東に対して一定の恐怖を抱いていた。¹⁵しかし 1984 年に日本を訪問したボイスは、日本人たちが他のどこの誰よりも彼をよりよく理解していることに気付いた。実際に日本に行き、東に関して語っている人たちに耳を傾けたボイスは意見を変え、彼の東方への恐怖心は消滅した。¹⁶

ボイスは、「多くの人々は、彼らの体自体が環境に属しているという事実を無視している。彼らは何もしくはどの（原文ママ）彼ら自身を囲んでいるものだけを彼らの環境だと考えている。」と述べている。¹⁷彼はまた、「モダニズムは問題を解決できない」と述べている。¹⁸ボイスは、自己の存在から出発するデカルトのコギトに基づく西洋近代はある種の意識を生み出し、それが心身問題を引き起こしており、またこの問題はヨーロッパの近代の構造内にて解決することができないことを知っていた。だからこそ彼は、この意識の形態を、チベット哲学における洗練された意識モデルの分析を通じて相対的に考えることができると考えたのである。

仏教では、全てのものはそれ自体で存在することは不可能であり、全てのものは無限の空（"Śūnyatā"）に基づく関係の中で存在していると考えられる。これは意識の抱える矛盾は近代の文脈の内部では解決できないというボイスの問いに答えを与え、またそうすることで、ヨー

¹⁰ Paik, Nam June. *Time Collage*. Tokyo, Isshi Press, 1988. P12

¹¹ Nam June Paik, LP liner notes for *My Jubilee is unverhemmt* (Edition Lebeer Hossmann; Hamburg and Brussels, 1977)

¹² Interview with Peter Moritz Pickshaus "Nam June Paik", *Energien/Synergien* 7, published by Kunststiftung NRW 2009. P98

¹³ Ulmer, Gregory L. *Applied grammatology: post(e)-pedagogy from Jacques Derrida to Joseph Beuys*. Baltimore, Johns Hopkins University Press, 1985. P234

¹⁴ Wijers, Louwrien. *Writing as sculpture, 1978-1987*. Amsterdam, Wiley-Academy, 1996. P151

¹⁵ Optimism as Cultural Rebellion: Matthew Stone interviews Louwrien Wijers

¹⁶ Optimism as Cultural Rebellion: Matthew Stone interviews Louwrien Wijers

¹⁷ Filliou, Robert. *Teaching and Learning as Performing Arts*. Cologne, Verlag Gebr. König, 1970. P171

¹⁸ Adrianin, Göts, and Konnertz, Winfred, and Thomas, Karin. Translated by Woodbury, Patricia Lech. *Joseph Beuys: Life and Work*. New York: Baroon's, 1979. P78

ロッパとアジアの双方が、どちらも単独で存在することはできず、おのおのの東西にあるものとの関係の中で存在することが可能になる。

興味深いことに、この仏教の中核となる概念は、ボイスにも影響を与えた新プラトン主義やケルト文化に影響を与えている。しかし、ルドルフ・シュタイナーを通じてアジアを理解しようとしていたボイスは、このアジアにおける意識のモデルに接続するための道筋を失ってしまった。また仏教美術の起源は西洋世界から多大な影響を受けているが、この事実は東洋世界ではあまり考慮されていない。仏教の持つ普遍的要素に興味を持ったパイクは、仏陀に関する多くのシリーズ作品を制作したが、パイク自身はそれをヨーロッパの文化史に接続することはできなかった。さらにその当時、仏教と西洋文化史を接続できる美術史家もしくはキュレーターはいなかったのである。

そこでこの論文は第一に、彼らのユーラシアにおける試みと、そこにおいて不完全だった部分を明確にし、そして第二に、ヨーロッパからアジア、そしてアジアからヨーロッパへの相互的な仏教の広範囲に渡る影響を実証することにより、ボイスとパイクの夢であった統一場としてのユーラシアを完成させる。

私はこの研究を、東西が統一された場所ベルリンの、ベルリン芸術大学にて完成させたい。この研究を通して、私はナム・ジュン・パイクがしたように、アジア側からヨーロッパへと返答し、私たちの未来のために、近代のオルタナティブを見つけたい。

主要参考文献

—外国語書籍—

Adrianin, Göts, and Konnertz, Winfred, and Thomas, Karin. Translated by Woodbury, Patricia Lech. Joseph Beuys: Life and Work. New York: Barron's, 1979.

Anderson, Benedict R.O. Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism. Rev. and extend, 2nd ed. London; New York, NY: Verso, 1991.

Becker, Jürgen, and Vostell, Wolf, eds. Happenings: Fluxus Pop Art Nouveau Realisme. Hamburg: Rowohlt Verlag, 1965.

Belting, Hans. Art history after modernism. Chicago: University of Chicago Press, 2003.

Beuys, Joseph, and Cooke, Lynn. Arena: where would I have got if I had been intelligent!. New York: Dia Center for the Arts, 1994.

Chambers, David. The Devil's Horsemen: The Mongol Invasion of Europe. London: Weidenfeld and Nicholson, 1979.

Claus, U We. Der Baum, der Stein. Stiftung Museum Scholoss Moyland, 1998.

Cooke, Lynne, and Kelly, Karen. Robert Lehman Lectures on Contemporary Art. New York: Dia Center for the Arts, 1996.

Filliou, Robert. Teaching and Learning as Performing Arts. Cologne: Verlag Gebr. König, 1970.

Hanhardt, John G., and Paik, Nam June. The worlds of Nam June Paik. New York: Guggenheim Museum Publications, 2000.

Hoffman, Katherine. Explorations: the visual arts since 1945. New York: HarperCollins, 1991.

Hunter, Sam, Jacobus, John, M., and Wheeler, Daniel. Modern art: painting, sculpture, architecture, photography. New Jersey: Prentice Hall, 2004.

Lee, Sook-Kyung and Rennert, Susanne. Nam June Paik. London: Tate Publishing, 2011

Levinas, Emmanuel. Translated by Lingis, Alphons. Totalité et Infini: essai sur l'extériorité. [Totality and Infinity: An Essay on Exteriority]. Pittsburgh: Duquesne University Press, 1969.

Lopez Jr., Donald S. "Introduction" Curators of Buddha: The Study of Buddhism under Colonialism. Chicago: University of Chicago Press, 1995.

McShine, Kynaston, and San Francisco Museum of Modern Art. Berlinart 1961-1987. New York: Museum of Modern Art, 1987.

Prestel museum guide, Hamburger Bahnhof, Museum for the Present. Berlin: Prestel, 1997.

Said, Edward, W. Orientalism. New York: Vintage, 1979.

The biennale of Sydney. 1988 Australian Biennale: from the Southern Cross: a view of world art c. 1940-88. Sydney: Art Gallery of New South Wales, 1988.

Thompson, Chris. Felt: Fluxus, Joseph Beuys, and the Dalai Lama. Minneapolis: University of Minnesota Press, 2011.

Ulmer, Gregory L. Applied grammatology: post(e)-pedagogy from Jacques Derrida to Joseph Beuys. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1985.

Wijers, Louwrien. Writing as sculpture, 1978-1987. Amsterdam: Wiley-Academy, 1996.

一 訳書 一

Deleuze, Gilles, and Guattari, Félix. Kafka pour une littérature mineure. Paris: Editions de Minuit, 1975.

ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ『カフカーマイナー文学のために』、宇波彰訳、法政大学出版局、1978。

Deleuze, Gilles, and Guattari, Félix. Mille plateaux: capitalisme et schizophrénie. Paris: Éditions de Minuit, 1980.

ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ『千のプラトー—資本主義と分裂症』宇野邦一、田中敏彦、小沢秋広訳、河出書房新社、1994。

Derrida, Jacques. Politiques de l'amitié. Paris: Galilée, 1994.

ジャック・デリダ『友愛のポリティックス』鶴飼哲、大西雅一郎訳、みすず書房、2003。

Descartes, René. Discours de la méthode pour bien conduire sa raison, et chercher la vérité dans les sciences. 1637

デカルト『方法序説』谷川多佳子訳、岩波書店、1997。

Droit, Roger-Pol. Le culture du neant: Le Philosophes et le Boudda. Editions du Seuil, 1997.

ロジェ=ポルドロワ『虚無の信仰 西欧はなぜ仏教を怖れたか』島田裕巳訳、田桐正彦訳、トランスビュー、2002。

Goethe, Johann Wolfgang. Faust. 1832.

ゲーテ『ファウスト』池内紀訳、集英社、2004。

Heidegger, Martin. Sein und Zeit. 1927.

マルティン・ハイデッガー『存在と時間』細谷貞雄訳、筑摩書房、1994。

Laerti, Diogenis. Vitae Philosophorum. Circa third century AD.

ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』加来彰俊訳、岩波書店、1984。

Nancy, Jean-Luc. [Après le sujet qui vient']. Hiver 1989.

ジャン・リュック・ナンシーほか『主体の後に誰が来るのか?』港道隆ほか訳、現代企画室、1996。

Schopenhauer, Arthur. Die Welt als Wille und Vorstellung. 1819

ショーペンハウアー『意志と表象としての世界』西尾幹二訳、中央公論新社、2004。

Sigmund Freud. Der Mann Moses und die monotheistische Religion. 1939.

ジークムント・フロイト『モーセと一神教』渡辺哲夫訳、筑摩書房、2003。

Spinoza, Benedictus de. Ethica: Ordine Geometrico Demonstrata. [Ethics: Demonstrated in geometrical order]. 1677

スピノザ『エチカー倫理学』畠中尚志訳、岩波書店、1677

Stachelhaus, Heiner. Joseph Beuys. Munchen: Econ, 1995.

ハイナー・シュタッヘルハウス『評伝 ヨーゼフ・ボイス』山本和弘訳、美術出版社、1994

Steiner, Rudolf. Einführung in übersinnliche Welterkenntnis und Menschenbestimmung.
[Shinchigaku]. 1909

ルドルフ・シュタイナー『いかにして超感覚的世界の認識を獲得するか』高橋巖訳、筑摩書房、2001。

-和書-

廣松渉『「近代の超克」論』講談社、1989。

柄谷行人『定本 柄谷行人集〈4〉ネーションと美学』岩波書店、2004。

中村元『龍樹』講談社、2002。

小岸昭『マラーノの系譜』みすず書房、1998。

ナム・ジュン・パイク『タイム・コラージュ』Isshi Press、1988。